

神秘の占星術

藤原良太

はじめに

人は誰もが異なる性格と個性を持っている。すべての人間がほぼ同じ構造の肉体を持っているのに、まったく同じ性格や特徴を持っている人間は、過去にも未来にも存在しない。果てしない命の営みの中で、人の性格や心がまったく同じように受け継がれるということは、言うまでもなく絶対にあり得ない。「あなたという人間は唯一の存在である」という事実は、もはや神秘を乗り越えて奇跡である。

しかし同時に人は異なるからこそ、争い、拒絶し、憎み、否定し、排除しようとする。自分と価値観の全く異なる存在は、もはや別の生き物に等しく、その存在を理解し受け入れることは困難であると言わざるを得ない。それ故に今日までに数えきれないほどの過ちと悲劇が繰り返されてきた。誰もが唯一の存在であり、誰もが尊い命であり、素晴らしい個性と尊厳を持った幸せになるべき存在であるはずなのに。もし唯一の存在であるあなたと誰かが、互いに理解をするという手段を放棄し、争い傷つけあうのだとしたら、それはもはや救いようのない悲劇である。

けれども、人間はそれぞれが異なるからこそ、これ以上なく相手を受け入れ想うことができる。誰かを強く信じ、愛することができるのだと思いたい。人は底知れぬ愚かな罪人であり、究極的なエゴの塊であるとしても、良心からの自由を選ぶことのできる尊い生き物なのだと思いたい。悪を避けて生きることを選べるということこそ、その人の人生に対する生き方であり、人間の持つ美しさの根源であると強く主張したい。

私は、問わざるを得ない。人間が真に尊い生き物ならば、なぜその人が生きる社会は、こんなにも劣悪なのだろうか。少し見渡せば、嘘偽りや直視に耐えぬ非道な出来事ばかりではないか。経済は常に変動し私たちを不安にさせ、金や名誉を得て優越感に浸ることが豊かなことだと錯覚し人々は躍起になる。教育機関は、学のない人間をいかに叩き落とす

かについて、まるで狂信者のように語るのにも関わらず、「あなた自身について」という極めて重大な問いに対しては、誰も答えようとしなない。知識は教えても、その使い方は教えない——。素晴らしい人間性を育み、一人一人の個性を尊重しようという意思是まったく感じられない。なぜ、身近にはたくさんの方がいるというのに人は不安と孤独におびえるのだろうか。どうして、無意味な争いを繰り返して美しい世界を壊そうとするのか。そしてなにより、なぜたった一人の唯一の存在である人間同士が争い、傷つけあうのだろうか……。私には極めて不可解で理解ができない。

遙か昔、古代の人々は宇宙に浮かぶ無数の星たちを神と崇めた。その想いは、科学の発展に伴い、今を生きる私たちが忘れてしまった自然の神秘に対する畏敬と感謝——からくるものだろう。占星術は、千年を軽く超える本当に長い時間をかけて考察をされてきた学問である。数多くの批判にさらされながらも、二度の消滅の危機を乗り越え、人々の心の中で生き続けてきたのは、私たち人間が理屈では説明できない星の神秘を感じ取っていたからだと思う。私が占星術の研究を始めたのは、「宇宙に浮かぶたくさん星を見つめることで、あなたという神秘の存在をより深く理解できるのではないか——」と考えたからである。

私は、考えたい。「人を想うとは、一体どういうことなのか」と。私たちは、いかなる存在で、どうして命を与えられてしまったのか。人生が与える多くの試練に苦悩し、何を学び、何を思い、そこから何をしなければならぬのか。その答えが、占星術のなかにあるような気がする。占星術と出逢い研究に没頭してきた日々の中で、いつかこの問いの答えを見つけることができたのなら——。その先には、私が強く渴望するこの世界で最も美しいものがそこに待っているような気がする。

1. 問題設定

本論は、主に西洋占星術の歴史とその過程で考察をされてきた占星術の学術性を述べつつ、占星術の根本的な問いに対する現代研究者の思想を読み解く。現代において占星術は、大衆文化の一種として認知されて

いるが、その歴史の過程では幾度も哲学的、神学的に考察されてきた。またカール・ユングを始めとする多くの著名な研究者や哲学者は、占星術の学術性を認めその発展に寄与した。けれども同時に、神学者やキリスト教主義者からの根強い批判にさらされ、迫害されてきた。そのような批判や認知について、現代研究者の意見を交えながら考察し、占星術を通じて星を観るといふことはどういうことなのか、その本質を伝えていきたい。

2. 占星術の概要と歴史

占星術の一般的な定義について、パトリック・カーリーは、次のように述べている。「占星術とは、地上の出来事やそこに住む人々の人生を天体の運行と結びつけて考える為に生み出された思想である」⁽¹⁾。つまり、太陽と月を含む惑星と地上に生きる人間の間に何らかの相関関係が存在し、社会や人間の在り方を経験的に結び付けて占う技術のことを“占星術”という。主に西洋占星術、東洋占星術、インド占星術などに区分することができ、それぞれに多種多様な方法論⁽²⁾が存在する。発祥は古代バビロニアの時代⁽³⁾と考えられている。

(1) 西洋占星術の技法

⁽¹⁾「この懐の深い定義は、占星術とはホロスコープの作成とその解釈だけでなく、天体の象徴性や天体的周期を通じての宇宙に対する問いかけであり、暦の計算や天文学考古学（天体の配置や方向、そして象徴性を宿した建造物の研究）、天体信仰、魔術的儀式やその他の占術、また占星術的象徴や天文学的周期を用いる情報の探求といった要素まで網羅している」（ニコラス・キャンピオン著、鏡リュウジ監訳、宇佐和通、水野友美子共訳（2012年）『世界史と西洋占星術』柏書房、10頁）。

⁽²⁾「占星術は一枚岩の思考法からなっているのではない。占星術には世界中に存在する自然に関する多数の語りや盛り込まれている。注意深く歴史を検証すれば、占星術とは魔術にして予言体系、また心理的成長の理論モデルであり、科学であり霊的（スピリチュアル）な道具であり、宗教にして占い（ディビネーション）の体系でもある多面的な存在であることがわかる。定義上、それぞれの面は互いに重なり合い、相互排除しない。占星術には、互いに競合しあう論理的根拠も数多くの技術体系も存在する」（同上、12頁）。

⁽³⁾「多くの近代人が宇宙を秩序や意味、かけがえのないものの源とみなしているが、それは間違いなく、先史から現代にまで続いてきた考え方なのだ」（同上、10頁）。

西洋占星術は、ホロスコープ⁽⁴⁾により人間の性格や未来の動向などを解き明かそうとする。具体的には、12星座⁽⁵⁾における太陽星座⁽⁶⁾と月星座、アセンダント⁽⁷⁾、惑星⁽⁸⁾と12のハウス⁽⁹⁾の位置や守護星に加えてそのアスペクト⁽¹⁰⁾を読む。それによって、人の性格や無意識的な衝動、対人関係におけるまで、あらゆるその人自身についての分析をする。星座にもエレメント⁽¹¹⁾とクオリティ⁽¹²⁾という概念が存在し、それぞれがホロスコープに影響を与えている。

(2) 占星術の根拠——天動説——

宇宙の惑星や太陽などは、どのようにして私たち人間と関わっているのだろうか。占星術は、ひとつの方法論や定義でくくることのできない多面的な存在であるが、そのすべての思想の根拠となった天動説という考え方が存在する。

天動説とは、近代天文学が発展する以前の時代に信じられていたプトレマイオスが唱えた「地球中心説」⁽¹³⁾のことである。いにしえの先人た

⁽⁴⁾ホロスコープ：出生天宮図とも呼ぶ。生年月日と生まれた時間、および場所を算出し、その人が生まれた時の星座や惑星の配置を示した図のこと。語源はギリシャ語で「時」を意味する *hore* と「観測者」の意味を持つ *skopos* からなる「ホロスコープ」から。「時間を見張るもの」という意味。

⁽⁵⁾12星座：正確には黄道12宮と呼ぶ。「牡羊座」、「牡牛座」、「双子座」、「蟹座」、「獅子座」、「乙女座」、「天秤座」、「蠍座」、「射手座」、「山羊座」、「水瓶座」、「魚座」の12の星座のこと。黄道とは、地球から見て太陽が地球を一周しているように見える通り道のこと。

⁽⁶⁾太陽星座：一般的に誕生星座と呼ばれている星座のことを指す。

⁽⁷⁾アセンダント：上昇宮とも呼ぶ。ホロスコープの東の地平線に位置していた星座のこと。

⁽⁸⁾一般的に水星、金星、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星を示す。現代の天文学では冥王星は惑星でないと定義されているが、占星術では変わらず重要な惑星として認識されている。

⁽⁹⁾12ハウス：ホロスコープを12個に分割している境界線によって分けられた領域のこと。

⁽¹⁰⁾アスペクト：座相とも呼ぶ。惑星同士の中心角の角度のこと。

⁽¹¹⁾エレメント：第四元素とも呼ぶ。「火」、「風」、「地」、「水」の4区分。

⁽¹²⁾クオリティ：第三区分、行動形態とも呼ぶ。「活動宮」、「不動宮」、「柔軟宮」の3区分。

⁽¹³⁾アリストテレスの哲学体系に取り込まれた「同心天球説」とプトレマイオスの天動説の2種がある。単に天動説という場合、後発で最終的に体系を完成させたプト

ちは、広い宇宙の中心に地球があり全ての天体が地球の周囲を公転していると考えていた。その時代の太陽を含む惑星は神であると考えられ、これは古代の学問にとって疑念の余地のない真理であった。先人たちは、惑星の神々が地上に働きかけ、天空に見えるものが地上に映し出されていると唱えた。つまり宇宙という事象が、地上という縮図の中に投影されていると考えたのである。

3. 世界史と占星術

占星術は、現在では大衆文化の一部として認識されているが、今も科学と宗教からの嘲笑と敵意の対象に晒されていることに変わりはない。けれども今日に至るまでの長い歴史を経て、哲学的にも神学的にも幾度となく議論されてきた。その西洋占星術の長い歴史を追っていくことにする。

(1) 起源

占星術の起源は、古代バビロニア⁽¹⁴⁾で行われた大規模な天体観測であるとされている⁽¹⁵⁾。西洋占星術に関する最初の記録は、紀元前 2000 年

レマイオスの天動説のことを指すことが多い。現在では間違いとされる。(Wikipedia「天動説」)。

⁽¹⁴⁾現在のイラク南部にあたる地方に栄えた古代文明の地のこと。

⁽¹⁵⁾『星占いのしくみ 運勢の「いい」「悪い」はどうやって決まるのか?』(鏡リュウジ、石井ゆかり (2009年) 平凡社)のなかで石井ゆかり氏は、鏡リュウジ先生に「星占いはいつ生まれたのでしょうか?」と言う質問をしている。その問いに対して鏡先生は、このように答えた。「占星術の歴史はおそらく、人類が知性を持ち始めた時にまでさかのぼると思います。今から二万年ほど前に彫られたフランスの「ローセルのヴィーナス」は、片手に 13本の線が彫られた三日月の様なものを持ち、強調された乳房やお腹から、生命を生み出す女性の神秘をかたどったものと考えられます。私たちのほのかな祖先は、満ちて欠ける月と女性の周期が合致していることに気付き、月の満ち欠けに生と死の周期を重ねあわせていたはずで。そう、この時代から占星術の萌芽が見られるのです」(鏡リュウジ (2007年)『はじめての占星術』集英社、130頁)。13という数字は一年の間に月が公転する回数のこと、月の満ち欠けの周期が約 29.5日で女性の生理周期と同じ、古代の人々は妊娠した女性のお腹が膨らみ出産してしばむことを月の満ち欠けのイメージと重ね、豊穡と女性の生産性に意味を関連付けて捉えたと考えられる。養育、母なる者、女性、豊穡などは占星術において月に象徴されるものであり、「ローセルのヴィーナス」にはそうした占星術の象徴がいくつも盛り込まれていると考えられる。

から 500 年にかけての間に、2 つの原則が構築されたという記録が残っている。紀元前 9 世紀頃のバビロニアで太陽、月、水星、金星、火星、木星、土星の 7 つの惑星を神々としてあがめ、生贄を捧げたり、その意思を伺おうとした形跡⁽¹⁶⁾が見られる。バビロニア占星術では、世界が観察的・経験則的証拠ではなく、抽象的・理論的確率によって分析されると考えられていた。

現在に残る占星術の元となったと考えられるのは、「プロト占星術」である。はっきりとした起源は不明だが、メソポタミアの南部にその起源があったと考えられている。紀元前 2000 年よりも前に星の神々の意思を伺おうとしたオーメン⁽¹⁷⁾による初歩的な占いが行われていたようである。オーメンは、主に過去の出来事の記録⁽¹⁸⁾に基づいた経験的な占いと捉えられるものだった。それらの記録は粘土板に記され、次世代に伝える知識として保存されていった。このように占星術のプロトタイプとなる星を基にした占いは、様々な自然現象によるオーメンの一部と記録の蓄積の過程の中で誕生した⁽¹⁹⁾。このオーメンに関する記述と、暦を作成するうえで必要だった当時の天文学的知識が結び付き、後の占星術の母体となるものが誕生したと考えられる。

(2) 形成期と衰退

バビロニアの天文学は、ギリシャ文明と後のローマ文明に大きな影響を与える。その影響は、千数百年にわたりヨーロッパの宇宙観を支配す

⁽¹⁶⁾黄道を分割したサインにより惑星を位置づけることで、それを天の予兆として占いに取り入れるようになったという説がある。

⁽¹⁷⁾オーメン：予兆のこと。当時の記録には動物の振る舞いや自然、天に関する現象（虹や雲、日の出や日没の状態など）がオーメンとして見られていたことがわかっている。

⁽¹⁸⁾過去の日食の日に洪水が発生したという事実から、日食は洪水のオーメンであるという風に考えられていた。そのほかには、月の暈は王冠に似ていることから、長い治世を表す善いオーメンであったという。月の暈とは、太陽や月に見られる光の輪のことである。

⁽¹⁹⁾このように占星術の起源となった手法と、現代の占星術の技法には大きな隔りがある。この当時のものは、オカルト的でまさに呪術とも呼べるようなものだった。

ることになる。2世紀頃、大天文学者のプトレマイオス⁽²⁰⁾が地球中心説⁽²¹⁾を唱える。同時にプトレマイオスが残した占星術書『テトラビブロス』は、占星術の礎を築く役割を果たした。しかし6世紀の西ローマ帝国でギリシャに関する知識が急速に低下してしまい、占星術の実践は一気に急落する。その原因は、イエス・キリストとその神のみを認めるとする一神教のキリスト教が、西ヨーロッパを支配するようになり多神教的な思想である占星術とその他の学問⁽²²⁾を排除する動きがあったからである。キリスト教思想において、新しい宇宙、世界の主はイエスであり、星を媒体としなくとも神と直接関係性を持つ存在と考えられたため、「宇宙と個人は直接関わることができる」という占星術の思想と「天界との繋がりには教会を通じてのみ構築される」と考えるキリスト教思想が大きく対立した。これにより星界や天界の神学は、キリスト教に吸収されることになり、学術的な意味の占星術は急激な衰退⁽²³⁾を余儀なくされる。

暗黒の中世⁽²⁴⁾により衰退を余儀なくされた占星術を含め、天文学、化学、錬金術や医学などの技術は、イスラム世界へと逃れることになる。キリスト教徒であったボエティウスの『哲学の慰め』が中世ヨーロッパに広がったことも、占星術の歴史に大きな影響を与えた。摂理である運命を星の動きによって分析し、予測する可能性を示唆したためである。8世紀後半、イスラム世界での占星術は、貴重な哲学的探究であり、神学の対象として受け入れられる。この背景には、遥か昔に書かれた占星術の文献に対する姿勢に根本的な変化があり、キリスト教信仰の脅威と

⁽²⁰⁾クラディオス・プトレマイオス：エジプトのアレクサンドリアで活躍した天文学者。

⁽²¹⁾地球中心説：地球を中心に太陽や月を含む惑星（水星、金星、火星、木星、土星）が、それぞれの周期で公転しているという説。

⁽²²⁾プラトンなどの古代哲学者についても、僅かなラテン語でしか知られなくなる。

⁽²³⁾占星術の衰退は、キリスト教の悪魔的だとする批判と糾弾に加え、夜空の星が救済の道筋を示す役割がキリスト教思想によって否定されたこと、同時に当時の占星術が異教的であったことも挙げられる。この論争は占星術哲学と実践の1500年に渡る歴史のなかで起こり、未だに終結していない。

⁽²⁴⁾暗黒の中世：西ヨーロッパで文化の発展が一時的に停滞した時代をこう呼ぶ。異民族の流入や教会が知識を独占したことが原因と言われている。

ならないと考えられたためである⁽²⁵⁾。ただし占星術の文献が再評価されるには、多くの時間を必要とした⁽²⁶⁾。800年から1000の間にホロスコープの使用と知的鍛錬としての占星術が再び注目され、哲学者たちは占星術によって、何がなされるのかを真剣に議論するようになる。

(3) 復興と崩壊

キリスト教福音主義者が占星術の批判を始めて約1000年後、ラテン語圏の西ローマの人々の中には、占星術の「深い知識の源泉となる可能性」に惹かれる者も現れ始める。こうした知識の追求⁽²⁷⁾は、当時圧倒的だった世界観を大きく変えることになり、カトリック世界とギリシャ哲学の根源を繋ぎなおした。12世紀に占星術は、プラトン哲学懐疑主義と悪魔的だとする教会の2つの思想と対立することになるが、13世紀にかけてアリストテレスの新しい理論⁽²⁸⁾が学術的関心を集め、その過程で占星術の重要性⁽²⁹⁾は極めて高くなり、西洋カトリック世界の知的革命により錬金術と占星術の関心⁽³⁰⁾が復活することになった。そのなかでもフィチーノ⁽³¹⁾は、イタリア・ルネサンスの宇宙論を提唱した理論家であり、その業績はルネサンス芸術に極めて重大な影響を与えている。

⁽²⁵⁾現存する文献は9世紀のものであるが、それも5世紀から8世紀にかけて占星術が衰退せずに大衆的に生き残っていたからである。

⁽²⁶⁾この間、占星術に関する哲学的論議とホロスコープの作成は廃れたままだったが、大衆的には高度な識字力や複雑な数学的要素を必要としないタイプの占星術が盛んにおこなわれていたようである。

⁽²⁷⁾ピエール・アベラール「神が未来を知ることは、占星術師が個人の行動を見越せることを示唆するのか」という議論は、占星術という特殊な技能への需要があった事実を示唆していると言える。

⁽²⁸⁾新プラトン主義思想を盛り込んだ物質世界と宇宙がシンパシーを媒体として相互に作用する世界観。

⁽²⁹⁾哲学者はアリストテレスが説く新たに統合された宇宙論において、占星術は人と永遠なるものの関係性を管理する実践的な方法であると捉えた。

⁽³⁰⁾判断占星術だけは例外。いかなる問いもホロスコープで導く姿勢だけは受け入れられなかった。

⁽³¹⁾マルシリオ・フィチーノ：ダンテやペトルルカの運動論について天文学の本を書く。占星術の普及者であると同時に糾弾している。この点についてニコラス・キャンピオンは、「自分が実践するものを糾弾する態度は矛盾という他ならない」と述べている。(『世界史と西洋占星術』、160頁)。

占星術は必ずしも非キリスト的とみなされることはなくなったが、それでも批判がなかったわけではない⁽³²⁾。やがて古い宇宙観は崩壊することになる。その要因にケプラー⁽³³⁾が、真円運動理論を否定⁽³⁴⁾したことが大きい。その結果、17世紀末までに中世の自然の影響力理論において、占星術は論理的根拠を失うことになる。占星術は、学術的議論の場から追放されることになり、みずからの立ち位置を模索することになるのだが、物理学と天文学の分野において、ニュートン⁽³⁵⁾が「万有引力の法則」⁽³⁶⁾を発見したことをきっかけに、1720年代になるとホロスコープが作られることは、ほぼなくなってしまった。占星術に対する啓蒙主義⁽³⁷⁾とキリスト教からの批判は、ほぼ無くなっていった。それまでに占星術が、ほとんど消滅したような状況に陥ったからである。

(4) 再生と現代

17世紀の終わりに衰退した占星術は、大衆的に求められる人たちの間でわずかながらに生き残り、19世紀後半のイギリスで復興を果たす。その背景には、啓蒙主義への反動や東洋世界への憧れなど様々な要因が考えられるが、やはり17世紀のイギリスで、占星術的予言が当時の社会に少なからず影響を与えていたことも大きい。特に17世紀に活躍した

⁽³²⁾1494年の7月、フィチーノの弟子であるピコ・デラ・ミランドラ著の『占星術反駁』では、「占星術は哲学的にも、技術的にも欠陥があり、経験的証拠により否定された」と激しく非難している。また同年に占星術師のシモン・デ・ファレスが、出生チャートと魔術図を含む占いを目的とした占星術書を持っていたことが原因でパリ大学神学部から糾弾された。保守的聖職者は、判断占星術を行う人間が個人で運命を語ることを嫌ったのである。

⁽³³⁾ケプラー・ヨハネス：ケプラーの法則を発見した近代科学の誕生に貢献した偉人の一人。

⁽³⁴⁾天体が天使や星々のインテリジェンスと関わりなく自由に運動していることを証明してしまった。

⁽³⁵⁾アイザック・ニュートン：イングランドの自然哲学者であり数学者。ニュートン力学を確立し、近代物理学の祖とよばれる。

⁽³⁶⁾万有引力の法則：地上において質点（物体）が地球に引き寄せられるだけでなく、この宇宙においてはどこでも全ての質点（物体）は互いに引き寄せる作用を及ぼし合っている」とする考え方。（Wikipedia「万有引力」）。

⁽³⁷⁾啓蒙主義：人間の持つ理性を信頼し、その理性の力で迷信を廃してこの世界をつらぬく法則を発見していこうとする立場。（『はじめての占星術』、137頁）。

のは、ロンドン大火災を予言したウィリアム・リリー⁽³⁸⁾である。

19世紀から20世紀初頭にかけて、近代の占星術の新たな基礎を築き上げ、普及させるに大きく貢献したのはアラン・レオ⁽³⁹⁾である。占星術、神智学などの狭い世界で活動し、近代占星術における誕生星座や太陽宮など現代の生活に欠かせない概念に発展させることに非常に貢献した。そして20世紀にカール・ユング⁽⁴⁰⁾が占星術に関心を持ち、深層心理と占星術を結び付けたこれまでの「伝統的占星術」⁽⁴¹⁾と異なる「心理占星術」を誕生させる。1970年代に入り、占星術はかつての未来を予言するものから、自己探求、人間心理の方法へと再定義され、複雑な技法もかつてのものよりシンプルに親しみやすいものへと変わってきた。占星術はこうして、二度の衰退と再生を果たし現代に生き残ったのである。

4. 占星術における議論

以上、世界史における占星術の歴史とそこで考察されてきた学術的問いを簡単に要約した。ここからは、一般的に占星術に対してよく問われる問いかけに対して、現代の研究者と歴史を支えてきた偉大な研究者の思想を参考に考えてみたい。

(1) 占星術の論理性

占星術の論理的根拠は、前述のとおりプトレマイオスの天動説を基に

⁽³⁸⁾ウィリアム・リリー：イギリスの占星術家。1666年のロンドンを焼きつくした大火災を予言したことで有名。彼の著書『クリスチャン・アストロロジー』は、ホラリー占星術の教科書といえる。ホラリー占星術は、占いたいと思った瞬間のホロスコープを基に具体的な質問に答える占星術の技法の一種。

⁽³⁹⁾アラン・レオ：本名はフレデリック・アレン。イギリスの占星術家であり近代の占星術を復興し、現代のホロスコープの解読法を提唱した。

⁽⁴⁰⁾カール・グスタフ・ユング：スイスの精神科医であり心理学者。精神分析の創始者フロイトの弟子だったが、考え方の不一致で離反し独立する。集合的無意識などの概念を構築し、現代のユング心理学を構築した。占星術の研究をしていたことでも知られる。

⁽⁴¹⁾伝統的占星術は、まさに「当る・当らない」の占いです。白か黒かハッキリ判断しなければならないこのような占いは、心理占星術の世界とはほとんど相容れません。『星占いのしくみ 運勢の「いい」「悪い」はどうやって決まるのか?』、151-152頁)。

している。しかし、現在の認識では「天動説は間違いだ」という認識が一般的である。ならば、間違った論理を根拠とする占星術も、また間違っているように思われる。

伝統的占星術では、その天動説の論理性を宿命論が補う。つまり古代の真理であったように星を通じて運命は見通せるのである。これが伝統的占星術による占いによって、問いに対する明確な答えが得られる理由である。ただしそのあとの結果に関して、伝統的占星術は介入をしない。つまり占いが当たらなかった場合は、答えを導き出す手法および過程か、解釈の方法が間違えていたと考える。そしてその占いの制度をより高めていこうとするのが、現在の伝統的占星術の立場である。

問題は近代に普及してきた心理占星術の方である。心理占星術においては、天動説の論理性を「生命の相関性」⁽⁴²⁾がその前提を裏付ける役割を担っている。簡潔に言えば、人間と自然は密接に関係し互いに影響を及ぼしあっている前提⁽⁴³⁾を踏まえ、地上の人と宇宙の星も例外ではないという考え方。また古代より受け継がれてきた貴重な営みとして、占星術を衰退させるより活用すべきという発想もある。しかし、宇宙の星と人間の生活が相関関係にあると言っても、人間の性格や心理という内面と星がいかに関係性を持っているのかという疑問は残る。この問いへの答えとして、石井ゆかり氏の意見を引用したい。

「現代社会には、「すべてのことは科学の力で解明しうる」という前提があります。世界は、未知のものと既知のことでできています。

⁽⁴²⁾生命の相関性：あらゆる命（人間や動物など）と自然現象（森林や海などの自然環境から、宇宙を含む天体、地震や洪水などの自然現象まで）は密接に関係しているという考え方。例えば、人間の食欲さにより自然を破壊してしまえば少なからず人間の生活に影響が出る。地球の公転と太陽との位置関係が季節を彩るという現象、月の引力より潮の満ち引きが発生するなどである。

⁽⁴³⁾「ヨーロッパでは、その後五百年に渡って占星術が文化の中心であり続けた。背景には、大前提となる仮説がふたつあった。ひとつは、空に描かれた「兆」を通じて神が人間に語りかけるという、キリスト教徒にとって絶対的な信念。ふたつ目は、地球が自然の枠内でそれぞれの相互作用によって違う天体とつながっているという考え方である。太陽の暖かさを感じ、潮の満ち干と月との関係を見れば、これは自明の理に他ならない」（『世界史と西洋占星術』、11頁）。

「もう」わかっていること、「まだ」わからないこと。この 2 種類しかないのです。でも古代の哲学者たちはこのほかにもうひとつのことがある、と考えました。それは「不可知」のことです。人間の理性によって理解しうるものと、未だ理解しつくしていないこと、そしてもうひとつ、人間には決して理解しえないことがある。この、理解しえない「暗黒の世界」は、神話によってのみ、象徴的な形で捉えうる、というわけです。星占いの世界もそんな神話の世界に属しています⁽⁴⁴⁾。

「知っていること」、「知らないこと」、そして「理解しえないこと」が存在し、占星術はそうした理解しえない神話の世界に属しているという可能性を示唆している。つまり現在では、まだ占星術の神秘と人間心理の関係性におけるすべてを説明できる言葉と概念を持ち合わせていない。だからこそ、占星術の論理性と根拠において「感覚的な善性を信じる感性」によって支えられていると言わざるを得ない。けれどもこの曖昧さこそ、心理占星術における“ありのままの自分を否定しない”⁽⁴⁵⁾という思想につながる。

カール・ユングは、「占星術は少なくとも 2000 年に渡って人間の状態についての調査を積み重ねてきた。そして、この事実は心理学者にとって価値あるものとなる」という言葉を残した。アラン・レオは、占星術について「天体の運行が人間の性格に与える影響とその物質世界における顕現を明らかにする科学である」と述べた。また近代科学を誕生させた偉人であるケプラー、ガリレオ、ニュートンなども占星術や錬金術の

(44)石井ゆかり (2007 年)『12 星座』WAVE 出版、9-10 頁。

(45)心理占星術は、ホロスコープを通じた人間の性格を分析するが、星座や惑星の解釈をその人に無理やり押し付けて当てはめるべきではないと考える。例えば、ある二人の相性を占うとき、伝統的占星術では「相性が良いか、悪いか」のどちらか明確に判断するが、心理占星術は「単に相性が良いか悪いかで考えるべきではない」と考える。リズ・グリーン⁽⁴⁶⁾の解釈をすれば、「相性がいい、悪いなどという単純な二元論は避けなければならない…。相性が良いとされた結婚が往々にして不毛なものに終わってしまう一方、悪いとされた結婚が衝突を繰り返し双方の意識的な努力で相手を受け入れることで、非常に創造的なものとなる場合もある」(『星占いのしくみ 運勢の「いい」「悪い」はどうやって決まるのか?』、150 頁)となる。

実践を行っている。こうした過去の異人たちに対して、鏡リュウジ先生は次のように述べる。「今では科学と占星術は相容れないものだと考えられていますが、科学の歴史をふり返ると、これらは同じ根っこから発達したものであったことがわかります」⁽⁴⁶⁾。

結論として占星術の論理性は天動説を補足する理論により成り立つが、その正当性を科学的に主張する論理は現状において存在しないとしか言えない。そもそも、占星術は科学を前提にした理論ではないからである。だからこそ占星術に関心や行為を示す人も、不審に思い嫌悪するどちらの反応も正しい。問われるのは、占星術の論理性が含む曖昧さを人間の介入する余地のある神秘と捉えるか、論理的な欠陥と捉えるかである。

(2) 未来予言と運命——神学と宿命論の問い——

占星術は、しばしば未来を予言する、運勢を占うというものと認識される。この認識は伝統的占星術の立場であるが、問題となるのは「占星術が見通すものは、人間の避けることのできない宿命を意味するのか」という問いである。たとえば、占星術に対して神学的にこのような問いを投げかけられている。

「占星術に関する懐疑と論争は、この基本的前提に向けられたものではなかった。第一の異議は、未来に起きることを神以外の者が知るはずがない、という神学的視点に立っている。第二の意義は、証拠を求める視点による」⁽⁴⁷⁾。

占星術を使う人間は、太陽や月などの惑星が地球上の生命や社会と関係性があると信じている⁽⁴⁸⁾。しかし、そこには相関関係が見られるとい

⁽⁴⁶⁾ 『はじめての占星術』、135頁。

⁽⁴⁷⁾ 『世界史と西洋占星術』、11頁。

⁽⁴⁸⁾ 天界と地上がある種の因果関係によって客観的な基盤を基につながっているという思考。それは自然占星術と呼ばれ、神や霊的なものの介入、そして「魂」抜きのアstroロジーである。宇宙の生きた有機体と見なし、占星術師自身が宇宙と秘密の共謀関係をあやなしており、霊や魂が大きく関与してくるとみなす「判断占星術」

うだけであり、原因と結果が必ず存在するとは限らない。それは先に述べたように、占星術の論理性に一定の曖昧さを含んでいると同時に現代においても、占星術の理論と神秘の全容が明らかになっていないからである。この点で占星術は、宿命論を否定すると同時に絶対の運命を見通すことは不可能だとしている。このことに対して、鏡リュウジ先生と石井ゆかり氏の意見を参照したい。

「この本には愛や人生といった大問題に対する「答え」は、ありません。運命を好転させるための秘術も載っていません。占星術家は、魔法使いでも神様でもないのです。また、人生を「こう生きるべきだ」という安易な指針を出すための教師でもありません。では、この本にあるのは何でしょうか。それは、あなた自身、という最大の神秘に、ほんの少しだけ接近するためのささやかなヒントであり、ツールです。占星術で用いるホロスコープ（出生天宮図）は、あなたがこの世に誕生したときにあなたを祝福していた星の配列図です。占星術家は、このマップを見ることで、あなたという複雑極まりない人間が、どんな構成を持っているのか、手がかりを得ることができると考えています」⁽⁴⁹⁾。

石井ゆかり氏は、占いについて次のように述べている。

「星占いには、それが「当る」ということについて、なんの裏付けもありません。「星占いでは未来を正確に予知できる」とは証明されていません。一方で、「占いは統計だ」と考える方もあります。ですが私には、それも正しいと思えません。よくいって、個々の占い師の「経験則」の範囲を出るものではないと思います。私の占いを読んで、当たっているとおっしゃる方もありますが、ぴんときません、

ないし「占い」(Divination) (『世界史と西洋占星術』、6頁)。

⁽⁴⁹⁾ロビン・マクノートン著、鏡リュウジ監訳、高田有現訳 (2005年)『星が教える恋愛事典』ヴィレッジブックス、5頁。

とおっしゃる方も多くいらっしゃいます。私自身、星占いを信じているかと聞かれれば、信じていません、とお答えします。現実にかかる事象との相関関係を証明できない「占い」を、単に昔から存在するというだけで「信じる」のは理性的であるべき人間として間違った態度だと思います⁽⁵⁰⁾。

鏡リュウジ先生は、占星術によって見られるものはあくまでも可能性にすぎないとの意見を述べている。石井ゆかり氏は、星占いを含めた占いを長い考察をされてきたという事実だけで、信じるのは間違いだとまで言い切っている。要するに占星術で未来を予言することはできないと考えられる。では人は何故、占いをを行うのだろうか。どうして星を見つけることで、未来に思いを馳せるのだろうか。石井ゆかり氏は、続けてこう述べている。

「人間は弱い生き物です。不安や心細さ恐怖心や罪悪感など、様々な気持ちが現実を見る目を曇らせます。恋人との別れやリストラ、試験の失敗などは、それがまがう方なき現実であったとしても、その瞬間には「そんなはずはない」と目をそむけたくなるようなできごとです。さらに、人生では「自分ではどうにもならないこと」というのがあります。天災や大切な人の喪失といった体験は、理性でにわかには受け止めることが困難です。見えない気持ち、見えない未来。そんな手の届かない場所にあるものを受け入れるための道具として、人は半信半疑に片目をつぶりながら占いを使います⁽⁵¹⁾。「私は「占い」は所詮「占い」でしかない、と考えています。つまり、一人の人間が自分の頭と身体と心でこの現実世界を体当たりで捉えようとする真摯な態度を前にして、存在してはならない怯懦な道具だと考えています。でも、そんな人間の弱さが生み出した道具でも、そのしくみを詳しく深く考えていくと、人間がどのように世界を捉

⁽⁵⁰⁾ 『12 星座』、7-8 頁。

⁽⁵¹⁾ 『12 星座』、8-9 頁。

えているのか、どのように世界を理解しようとしているのかが、うっすらと見えてきます。そこには、古代から現代まで変わることのない人間の世界に対するまなざしが、そのまま埋め込まれているように、私には思えます。この得も言われぬおもしろさが、私が星占いを続けてきてしまった理由の、最たるものです」⁽⁵²⁾。

人は誰もが弱い存在であり、先の見えない未来への漠然とした不安は、誰もが抱える。苦しい状況に追い込まれたとき、何の根拠もなく絶望の中に救いを求め信じる。突如襲いかかった不幸な災いを「運命」という一言で納得することはできない。だからこそ、古代の人々は占星術を論じたのではないか。漠然とした未来への不安を少しでも癒したいという思いに答えるための手段として、星を神という存在へ定義しその意思を問いかけたのではないか。そう考えるならば、占星術にとって重要なのは、未来を見通すことができるかということよりも、どうすれば人の心の痛みを癒すことができるのか、と考える方が意義のあることではないかと思う。

5. 結論——占星術の意義——

占星術の意義とは、「唯一の存在への尊厳」という一言に尽きる。それぞれの人間が本当の意味で誰かを見つめ、理解しようとする姿勢を持つことができれば、理解しあえる関係は必ず生まれる。それは、私たちにとってとても大切な一歩となる。確かにすべての人間を受け入れることなどできない。相手を理解し向き合おうとすることは、それほど容易いことではないからである。

けれども、相手を理解しようと、向き合おうとひたむきに努力することはできる。私たちは、他者と接するとき自分のなかにある概念や常識を捨てなければならない。人によって文化や常識が異なれば、自分と違った価値観を持っていて当然だからである。ありのままの誰かと対話することができるようになったとき、私たちはきっと理解しあえる。そ

⁽⁵²⁾ 『12 星座』、11 頁。

には揺るぎない絆が生まれ、人を想う力そのものになる。私たちが互いにほんの少しだけ認めることができたのなら、不要な争いは減り、すべての人間が手を取り合い、何ものにも脅かされることなく生きていけるはずだと私は信じている。そのためには、私たちが生まれ持った心と理性に適った選択をしなければならない。異なるものを拒絶し、排除し、不用意な争いを続ければ、同じ悲劇を延々と繰り返すことになる。一人一人が異なるからこそ、私たちはその違いを見つめて、自分自身を成長させなければいけないのだと思う。

他者の存在を理解するためには、知りたいという欲求が必要であり、そのひとつの手段として占星術は有益だと思う。誰かの理解者になろうとすること、そしてそう在りつづけることは辛く困難な試練である。弱さを赦し受け入れる懐の大きさと、無力に手を差し伸べる勇気が必要になる。この世界に誰一人として、同じ命は存在しない。誰もがそのことを知っている。しかし、私たちは普段そのことを意識することなく忘れていく。だからこそ、とても安易に人の想いを傷つけ、理解することを諦めてしまう。他者から受け入れられること、それは「赦される」ということであり、誰かを受け入れるとは、「誰かを赦す」ということである。それは代えがたい幸福であり、何より尊い言葉である。その為の手段として、私は占星術を選んだに過ぎない。手段はどうあれ、あなた自身が何らかの方法で自己理解を深め、自身を幸せに出来たのならこんなに素敵なお話はないだろう。そして、たった一人でも誰かを理解したいと思えるのなら、その瞬間あなたはその人の本質をしっかりと見て、受け入れることのできる芯の強い人間へと生まれ変わる。その時に占星術は、あなたの手助けとなると私は信じている。

終わりに

研究をしていて、ふと思うことがある。「私の研究には、意味があるのだろうか…」と。占星術研究家の鏡リュウジ先生の言葉にあるように、星を観る者は決して傲慢であってはならない。占星術によってかけがえのない運命を予言すること、あたかも真実のように語ること、未来への

可能性を狭めることは、絶対に許されてはならないのである。占星術は、万能ではないという戒めとして、この言葉を胸にしまっている。星を観る者に許されたのは、大切な人たちの未来の希望を願うこと、誰かの本当の姿にほんの少し近づこうと努力することのみである。ならば私は、一体何のために研究に時間を費やすのだろうか…。

石井ゆかりさんの著書の中にこのような一文がある。

「そのとき、「祈るということは、もう自分の力ではどうにもならない、ということを実感するための行為なんだ」と痛切に思いました。自分にはなにもできないときに、たったひとつだけ残された「祈る」という行為。不可解な世界を受け入れてそれでも、自分の時間を精一杯生きるために、何千年も昔から、私たちはその行為を大切にしてきたのだろうと思います」。

石井ゆかり『愛する力。』⁽⁵³⁾

祈るだけでは、何も変えることはできない。けれども、純粋に“誰かのために”という想いは、この世界の秩序の根底にあるべきものだと思う。その意味では「誰かのために祈る」ことは、決して無意味なことじゃない。だからまず、身近にいる人たちの未来や幸せを願って祈りたい。困っている誰かへ手を差し伸べられるような人間になれるよう努力をしなければいけないと、短いながらも濃い 20 年という時間のなかで、経験した多くの出来事から学び、出逢った素晴らしい人たちの生き方を見てそう思った。結局、そんな風に生きることができていない自分に歯がゆい思いをしながら、今も研究を続けている。

「占星術とは何ですか？」と問われれば、私は「誰かへの祈りである」と答える。何故なら、私たちは他者へ“知りたい”という欲求を持っている。それは、大切な人たちの幸せを心から祈りたいからに過ぎない。占星術は幾年にもわたって、そうした純粋な人の思いへ寄り添い、断片

⁽⁵³⁾石井ゆかり『愛する力。』(2014) 幻冬舎、191 頁。

的な答えをこれまで示し続けてきたのだらうと思う。自分のための祈りが、身近な誰かのための祈りへと変わったとき、それこそ本当の意味での人道主義なのではないか。真剣に祈りを捧げる人の姿こそ、人間が人間である所以なのではないか。

私は、たとえ現実社会に腐敗した悪が蔓延ろうとも、救いのない悲劇が襲い掛かったとしても「人は良心の自由から誰かの幸福を願う尊い生き物だ」と確信している。人として生まれたすべての命は、決して神の似姿となれないことを理解しながらも、そうなれるように努力をしなければならない。私たちの命など、空の星が輝く時間に比べれば、ほんの一瞬に過ぎないのかもしれない。けれども、運命が与える多くの試練に苦悩し、それでも胸を張って生きたいと努力する過程の中でこそ、無償の愛は育まれる。そこに芽吹く想いこそが、誰かの幸福を心から祈るということであり、そのみが決して揺るがない価値と想いを秘めた真実の愛である。

「挫折と敗北と、当時の私はあまりに無力でした。
つまりそれは比類なき青春でした」。

レフ・プーシュカ『回想録』

[参考文献]

リズ・グリーン著、鏡リュウジ・岡本翔子共訳（2013年）『占星学』青土社。

キャロル・S・ピアソン著、鏡リュウジ監訳（2013年）『英雄の旅 ヒーローズ・ジャーニー 12のアーキタイプを知り、人生と世界を変える』実務教育出版。

マリィ・プリマヴェラ（2013年）『月星座と太陽星座でわかる性格と相性 親と子の「幸せ」づくり』東邦出版。

サッフィ・クロフォード、ジェラルディン・サリヴァン共著（2012年）

- 『愛蔵版 誕生日大全』主婦の友社
ニコラス・キャンピオン著、鏡リュウジ監訳（2012年）『世界史と西洋占星術』柏書房。
- ロビン・マクノートン著、鏡リュウジ監訳（2005年）『星が教える恋愛事典』ヴィレッジブックス。
- テレサ・ムーリー著、岡本翔子監訳（2005年）『月の大事典』ヴィレッジブックス。
- チャールズ・ハーヴェイ、スージー・ハーヴェイ共著、鏡リュウジ監訳（2003年）『月と太陽でわかる性格事典』ヴィレッジブックス。
- 鏡リュウジ、石井ゆかり共著（2009年）『星占いのしくみ 運勢の「いい」「悪い」はどうやって決まるのか？』平凡社。
- 鏡リュウジ（2004年）『星座でわかる運命事典』ヴィレッジブックス。
- 鏡リュウジ（2006年）『ホロスコープが自分で読める 星のワークブック』講談社。
- 鏡リュウジ（2007年）『はじめての占星術』集英社。
- 鏡リュウジ（2008年）『鏡リュウジ 誕生日バイブル』ヴィレッジブックス。
- 鏡リュウジ（2009年）『あなたの星座と運命』説話社。
- 鏡リュウジ（2011年）『月占い』武田ランダムハウスジャパン。
- 鏡リュウジ（2013年）『星のワークブック【相性編】』講談社。
- 鏡リュウジ（2013年）『鏡リュウジの占い大事典』説話社。
- 石井ゆかり（2007年）『12星座』WAVE出版。
- 石井ゆかり（2009年）『愛する人に。』幻冬舎。
- 石井ゆかり（2011年）『星読み+』幻冬舎。
- 石井ゆかり（2012年）『星をさがす』WAVE出版。
- 石井ゆかり（2013年）『星の交差点』イースト・プレス。
- 石井ゆかり（2013年）『石井ゆかりの星占い教室のノート』実業之日本社。
- 石井ゆかり（2013年）『月のとびら』阪急コミュニケーションズ。
- 石井ゆかり（2014年）『愛する力。』幻冬舎。

石井ゆかり（2014年）『ひかりの暦』小学館。

石川源晃（1996年）『辞典・占星学入門——星の言葉を聞こう 新しい占星学時代での用語解説——』平河出版社。

神谷充彦（2009年）『詳解 月の正統西洋占星術』学研パブリッシング。

岡本翔子（2011年）『「月のリズム」で夢をかなえる ムーン・マジック』KKベストセラーズ。

西條のゆり（2011年）『いちばんやさしい占星術』成美堂出版。

中山茂（2011年）『天の科学史』講談社学術文庫。

松村潔（2012年）『月星座 占星術入門 じぶんの月星座を知って人生を変える本』技術評論社。

中村士（2013年）『西洋天文学史』丸善出版。